詩による鑑賞指導（下）

――中学生の興味と関心に基づいて――

畑　　実・鈴木洋一郎・佐藤クニ子・酒井為久

I　研究目的と方法

文学教育の一環として詩の鑑賞指導の果たす役割は大きい。詩を正しく鑑賞することによって，われわれは生徒の感じ方，考え方を望ましい方向に育て，さらに生活の中で経験するさまざまな姿や，思考したもの，感受したものを文学作品にまで形象化する力を養い，健全な感性的生活を営ませようとするのである。

詩を鑑賞する場合には叙述の一語一句をたどり，ことばの理解を通して詩によみこまれている情景や心情を味わうのであるが，知的作用としての理解は大体同じものであっても，感動の質や密度は鑑賞する人間によってかなり違うのである。これは各人の感覚の鋭さ鈍さにもよるが，それよりも生き方の問題，つまり現実の問題に対してどのように考えたり感じたりしているかという，その人間の生き方全体にかゝってくるのではなかろうか。鑑賞上のこうした個性的，主観的な面に指導の困難と，時には限界を感じるのであるが，効果的な指導によって，生徒の感動を高め，望ましい方向に伸ばさなければならない。

この目的を果たすためにどのように指導の研究を進めていったらよいかを，昨年度の紀要（第5集）で述べたがその計画に基づき，次のように考えてみた。

(1)　調査によって，生徒の詩に対する興味や関心の程度，方向をつかむこと。

(2)　適切と思われる詩を生徒によませて感想文を書かせ，鑑賞の態度の著しい偏向や特徴を見出すこと。

(3)　以上(1)(2)を手がかりとして鑑賞上の諸問題を追求し，生徒の実態に即した効果的な指導の方法を研究する。

中学生（1，2年）を対象として，この調査と感想文の提出を行なった結果を表に整理すると以下のようになる。感想文の中に著しい偏向や特徴を見出すことができなかったが，これは生徒に与えた詩がいずれも生徒作品（中学1年生）であったために，内容に問題が少なかったことも考えられ，詩の選択については今後の問題として残したい。

II　詩に対する興味と関心の調査

（一）

調査1　詩を鑑賞することの好き嫌い

表 (1)

人員 ＼ %	中学1年 男子	中学1年 女子	計	中学2年 男子	中学2年 女子	計
好き	33	41	37	44	68	56
普通	60	54	57	40	30	35
嫌い	7	5	6	16	2	9

この表によって男女別の比較をしてみると男子は女子に比べて興味は少ない。これは女子の性格が情緒的であるのに対して，男子のそれが論理的であるところから当然の結果と思われる。この傾向は1年から2年になるにつれてはっきりしてくる。

次に学年別の比較をしてみると，1年では「普通」の比率がもっとも大きく57%を占めているが，2年になると「好き」の比率が56%でもっとも大きい。これは1年生の頃は詩に対する親しみも少なく，至って無関心な状態にあると思われる。

調査2　好きな理由と嫌いな理由

好きな理由としては

1.　短かいことばの中に人間の気持や，美しい風景がえがかれているのでわかりやすい。

2.　えがかれている風景や人間の気持を味わったり，考えたりするのが好きだ。

3.　自分の気のつかなかった点や，思っていてもうまく言い表わせない気持がよまれている。

嫌いな理由としては

1.　感想をまとめて発表するのが嫌いだ。

2.　興味がなくて詩のよさがわからない。

3.　語句の意味や表現のしかたがむずかしい。

嫌いな理由について注意しなければならないことは，1と2をあげている者がもっとも多く，3をあげ

ている者が1年生で10名，2年生では1名だけということである。記名の調査であったから，恥ずかしがって正直に書かなかった生徒も多少はいたと思うが，まず詩に親しませることを考えねばならないと思う。

調査3　好みの傾向

表 (2)

順位	好　き　な　詩	%
1	生き生きとして力強い詩	18.5
2	季節の感じがよくあらわれている詩	12.7
3	静かで明るい詩	13
4	あたたかい愛情のあらわれている詩	11.3
5	喜びと幸福にみちた詩	10.8
6	美しい風景をよんだ詩	9.8
7	淋しくて落着いた詩	8.3
8	想像しながらよんだ空想的な詩	5.3
9	しみじみとして悲しい詩	5
10	人間の生き方や関係について考えさせるような詩	4.7

この調査については，学年別，男女別の差はあまりなかったので全体として整理した。季節感の溢れた具体的な叙景詩がもっとも親しみやすく，思索的な詩や，想像力をはたらかせて鑑賞する詩にはあまり興味を持っていない。9の思索的な詩を好きなものとしてあげているのは成績の優秀な生徒ばかりであった。

調査4　鑑賞の難易

(A)　　雁　　千家元麿

暖かい静かな夕方の空を
百羽ばかりの雁が
一列になって飛んで行く
天も地も動かない景色の中を不思議に黙って同じように一つ一つセッセと羽を動かして黒い列をつくって
静かに音も立てずに横切ってゆく
側へ行ったら翅の音が騒がしいのだろう
息切れがして疲れているのもあるだろう
……
……略

(B)　　遠い昔のように　　丸山　巌

雪のふる夕ぐれ
道を歩いていると
ふと
額をはらったものがある
桜の枝だ
おや，もうこんなに
雪がつもったのかしら
雪がつもって
もうこんなに道が高くなったのかしら

春のころ　この枝を
仰いだことを思い起す
枝の花をすかして
うすみどりの色の空を
仰いだことを思い起す
明るいそのまぼろしを
遠い昔のように思い起す

上の(A)(B)の詩について調査したところ，次の質問に対しての答え方が不十分であった外は，別に問題はなかったように思われる。

上の二つの詩はそれぞれ作者がどのような立場でよんだのですか。

(A)の詩について

イ．実際に見てよんだ詩　ロ．音を聞き思ってよんだ詩　ハ．想像してよんだ詩

(B)の詩について

イ．秋に冬のことを思ってよんだ詩　ロ．冬に過去の冬を思ってよんだ詩　ハ．冬に春を思ってよんだ詩　ニ．春に冬を思ってよんだ詩

(B)の詩で，作者の歩いている道は次のどれですか。

イ．明るい時の道　ロ．薄緑色の空の下の道　ハ．暗い空の下の道

この質問の結果をみると，作者の立場を十分把握し，その立場に立って詩を味わうことがむずかしい。つまり作者のいる場所，時間，明暗などの情景や，心の状態などを想像することが困難なようである。また，(A)の詩はかなり長い詩であるが，これを好む者が多いし，味わい易いとしているのは，叙情性の素直さや豊かさによるものと思われ，したがって親しみやすい詩においては形式の長短による鑑賞の難易さはないことがわかった。

（二）

感想文1

山ざくら（生徒作品）

字をほられたさくらは，
黒茶けた木はだで
北風の中にどっしり立っている。
それはひゞやあかぎれよりもあらく，
あら山でそだった子どもらの，
足のはらよりもあらい。

みきが二つにわかれている。
でも，枝の先からは
ほっくらと
かわいい若芽がでている。

この詩の感想文を整理してみると

1. いためつけられた桜の木であるが，枝先から若芽が出ているというところに，生命力の力強さを感じた。

2. 「ほっくらと」ということばによって寂しさ，暗さ，寒さの中にほのぼのとした暖かさが感じられる。

3. 傷ついた木はだの桜を人間の「ひゞ」や，「あかぎれ」など具体的なものにたとえてあって表現がうまい。

このような具体的な叙景詩はわかりやすく，また力強さに親しみを感ずるらしく，異常な感想文はなかった。

感想文2

足あと（生徒作品）

落穂ひろう目に
かあちゃんの足あとをみつけた。
はだしの小さな足あと
くろいやわらかな土の上に
はんこ，おしたような五本のゆびもある。
「五反歩も1人じゃえらいぞ。」
刈りおわった田をのぞきながら，
かあちゃんはいっていた。
夕日がしずもうとして空が赤い。
小さな足あとは，
生きているようにはっきりしている。

この詩の感想文を整理してみると

1. 母に対するいたわりの気持がよくあらわれ，愛情の溢れた詩だと思う。

2. 一家を背負って働く母の姿が何となく痛々しく感じられる。

3. 夕日の赤く染めている中で働く母の姿が力強い。

4. 夕暮れの農村の情景が素朴で美しい。

このように大体正しい鑑賞が行なわれていたが，「小さな足あと」という表現についての受け取り方に深い浅いの差違があった。

1. 苦労している母に対するいたわりの気持を「小さな」ということばで表現した。また2回目の「小さな足あと」は母の苦労の跡が力強く残っている様子をうまく表わしている。

2. 母は小柄な人で足が小さい。

3. 寒さでちゞんだ足なので足あとも小さい。

4. 小さい子どもが手伝ったので，その子どもの足あとが小さい。

2.3.4.のような受け取り方をしている生徒が中1では40%，中2では20%いたが，これらの生徒はことばの表面のみ理解し，表現のニュアンスを感じとって詩を鑑賞することができないのである。

Ⅲ　鑑賞上の諸問題と指導

以上の調査と感想文，それに日頃の授業の経験を合わせて，鑑賞上の問題点をいくつか抽出し，この解決にはどのような指導が適切であるかを考えてみた。

（1）　詩に対する興味，関心の低調

表(1)を見ると詩を鑑賞することが好きでも嫌いでもなく「普通」というのが非常に多い。これは詩に対する無関心さを示しており，また調査2によると，嫌いな理由として「興味がなくて詩のよさがわからない」とあげているのも同様である。

詩に親しませること，これは何といっても一番大きな問題であろう。教材の詩を通して，詩人に関心を持ち，いろいろな詩集を読んでみる。そして愛誦する詩を折にふれて口ずさむといったところまで関心を高めたいものである。生徒の中にはかなり多くの詩集を読み，詩人や詩集の名まえを知っている者もあるが，単なる知識にとゞまっていて，感動をもって自分の心の中に印象づけられていることが少ないのである。この問題については，指導の際次のような考慮が必要である。

イ．生徒の生活，能力，心理的発達段階に応じた詩，つまり共感をよぶような詩を与えて，鑑賞の機会をつとめて多くする。

ロ．詩を作らせ，またそれを発表して表現の喜びと自信を持たせる。

（2）　想像力の不足

調査3，4の結果，叙情性の深い作品ほど鑑賞が困難になり，また作者の立場に立って味わうことができないとも言えるのであるが，これは生活経験の乏しさとともに想像力が豊かでないことによるものである。

表現面の知的理解のみに終ることなく，作者のえがく世界を味わい，さらに新しい意味を加えて鑑賞を深めていくためには，豊かな想像力を養うことが必要である。この問題については，指導の際次のような考慮が必要である。

イ．感じたこと，考えたことを作品に形象化するた

めに必要な構想力は，直接想像力につながるものである。したがって構想指導に重点をおいてできるだけ多く生徒に作品を書かせなければならない。

ロ．しかし作品に表現する前に，生徒の生活意識の問題がある。何の感動も，何の問題もない生活を送っている生徒がいかに多いか。このような生徒は表現する題材を持っていないのである。すべての文学教材を通して，われわれは生徒に人間や自然の姿を見つめる態度を学ばせていくべきであるし，と同時に生徒の個性に応じた読書指導とか表現指導も必要である。

（3） 読解力の不足

詩の構成を理解して，詩想の展開を追究したり，表現を分析して作者のおかれている立場と主題との関係を考えたりすることのむずかしさは調査4でも言えるが，日頃の授業の経験から痛感させられることである。叙述を手がかりとして鑑賞がなされる以上，読解指導は十分行なわれなければならない。鑑賞は読解と平行して順次高い段階へ発展していくものである。直観的な印象だけですましたり，主観に偏した安易な態度で鑑賞したりすることのないように十分注意しなければならない。この問題については，次のような考慮が必要である。

イ．多くの作品や鑑賞文を読み，語感，韻律に親しみ，その味わい方を身につける。

ロ．詩の構成，詩想の展開を十分理解した上で主題をつかむよう指導する。

（4） ことばに対する感覚が不十分であること。

読解作用によってことばの意味を理解し，論理的に詩の内容を分析するのであるが，これだけで詩を鑑賞することはできない。論理的な過程をつきつめていくと，論理を超えた世界につきあたるように，詩の鑑賞もそうした矛盾を持っているのではなかろうか。ことばの知的理解とともに情緒的な面の感得が必要である。

鋭い感覚，これは詩歌や俳句その外多くの文学作品を通して身につけるよう指導されねばならぬ。この問題については，次のような考慮が必要である。

イ．詩は読みに始まり，読みに終るもので，読みの徹底を十分考えるべきである。しかしその場合作品の内容や形式などによって読み方をくふうしなければならない。定型詩で韻律の美しさを味わう場合には朗読を，自由詩で情景描写の美しさを味わう場合には黙読をするというように。そして読みのくり返しの中に自然にことばの韻律美や修辞の印象効果を感じとることができるのである。

Ⅳ おわりに

鑑賞指導を徹底させるためには，読解，表現の指導をかみ合わせた総合的な国語教育の上に立ち，生徒の個性に応じた生活指導の面にも積極的にはいり込まねばならないことを痛感する。

さきに述べた指導の態度に留意しながら実践した例を次にあげてみると

（1） 視聴覚教材の利用

レコードによる朗読の鑑賞を行ない，抑揚，速度，間のおきかた等に関心を持って，効果的な朗読ができるよう指導したり，またその詩のイメージを表わすような音楽を効果に使って，雰囲気を作ることを心がけた。「荒城の月」は文語定型詩で，中学生にとってはかなり言語的な抵抗が予想されたので，生徒に親しまれているメロディをレコードで聞かせることによって，いくらか詩の情緒を味わゝせることができたのではないかと思っている。

（2） 鑑賞から表現へ

鑑賞後の感想をまとめて発表できるように，口頭，あるいは文章による発表の機会をつとめて多くした。また，詩を散文体の文章に書かせてみたり，それと反対に散文を詩に書きなおさせた。詩と散文の違いが少しずつわかってきたように思われる。

（3） 詩の制作

昨年，中学生の文集作成を計画し，中1には写生文，日記文を，中2には随筆文，詩歌を，中3には創作をというように，学年の能力に応じた作品を提出させた。この中で特に詩の作り方の指導に重点をおき，個人的な指導をしてみた。

生徒の詩の中では，観念的な表現が非常に多いので，その場合には体験からにじみ出た具体的な表現の効果に目を開かせるよう指導してみた。例えば

真赤な夕焼けが
空いっぱいに広がっている。
まるで火の海のようだ。
その中に
たくさんの屋根が
とてもきれいだった。

成績は下位に属する生徒であるが，いくつも詩を書いては持ってきた。上の詩の「とてもきれいだった」の部分について，どうして「きれい」なのか，「きれい」ということばを使わないでも「きれい」だということをよむためにはどうしたらよいか，ということについて，もう一度夕焼けの景色をよく見てくるように指導

したところ，次のように直して持ってきた。

……

まるで火の海のようだ。
三角の屋根
四角の屋根
高い屋根
低い屋根
積木のような屋根が
並んでいる。

次の場合は，成績は上位に属する生徒であるが，表現がやゝ説明的だったので，その点を指摘し，緊張した雰囲気を盛りこむにはもっと簡潔な表現が必要であることを指導した。

白いボールが
グーンとせまってくる。
青い大空が一瞬かくれた。
両手にうけたボールを
力いっぱい返す。
……
……

上の詩は「バレーボール」と言う題であるが，次のように直して持ってきた。

「よしゃっ」
グーンとせまってくる。
青い大空が一瞬かくれた。
両手に重みが加わる。
「よいしょ」

体といっしょにはね返ったボール。
弧を描き
生きているように
だんだん小さくなる。

またも来る真白な体。
汗がにじむ。
「九十八」
「九十九」
「百」

少しの助言でかなり調子の高い詩を作ることもできるが，指導の効果が目に見えて表われたとは言い難い。今後さらに研究と反省を重ねて，鑑賞指導の目的を果たしたいと念願している。